

自己点検・自己評価



令和5年度評価の概要と今後の課題

I. 教育理念・教育目的

我が校の教育理念は、「看護職として必要な創造性・自主性・自立性を培い思いやりあふれた豊かな人間性を備え、地域に根ざすものとする」である。これは、本校の設置主体が大牟田医師会であることによる教育上の特徴を踏まえたものとなっている。6年度は新カリキュラム導入から2年になるため、今後も教育内容が教育理念・目的と一貫性があり、社会のニーズに応える内容になっているか引き続き検討していく。

II. 教育目標

令和5年度は新カリキュラム導入1年目であり実施することに主眼を置いた。6年度は、教育目標に沿った教育内容になっているか、教育内容に不足がないか、教科目間の内容調整や進度を検討すること、そして教育評価システムの構築をすることが課題である。

令和5年度は全実習時間数を臨床の現場で実施することができ、臨床現場で実際の患者に接することにより思考力、判断力を養うことができた。基礎看護学実習では、ルーブリック評価を取り入れ、自己の行動を省察、課題を見出し、主体的に課題に取り組む姿勢につながったが、評価の視点、点数配点などで課題があることが分かった。これらの項目について今後検討が必要である。

III. 教育課程経営

毎年、新年度に向けて教育内容の評価、科目間の関連性、進度などについて、検討・評価を行い、必要に応じて改善に向けた対策をおこなっている。令和5年度は、新カリキュラムを1年実施し、課題の明らかになった点については、再構築が必要となる。より充実した教育課程経営に向けて来年度以降も継続的に再評価をおこないたい。また、本校の特徴としては、新カリキュラムでは、学生が自らの心身の健康の大切さを実感しそれを患者に当てはめることが出来ることを目的とした健康論や解剖生理学の強化を目的に時間数を増やすなどの科目構成にした。今後は、その成果を見ていき評価していきたい。

令和5年度の教員の教育・研究活動については、以下のとおりである。

教育・研究活動

日本看護学校協議会学会（オンライン）	1名参加
日本看護学教育学会第33回学術集会	1名参加
福岡県医師会第1回看護学校長・教務主任会議	3名参加
日本看護学校協議会 第1回教育研修会（オンライン）	1名参加
福岡県医師会看護教育研修（オンライン）	全教員受講
福岡県私立専修学校 各種学校・同和教育研修会（オンライン）	1名参加
日本看護学校協議会 副学校長・教務主任会（オンライン）	1名参加
福岡県医師会看護師卒後研修会（オンライン）	全教員受講
人権・同和教育研修会	1名参加
福岡県看護師等養成所運営に関する会議（オンライン）	4名参加
福岡県看護教員継続研修 新任期	1名参加

教員の授業の準備については、学生への学習支援や実習指導などに時間を費やすことが多く、勤務時間内での授業準備時間の確保が課題となっている。

実習では、新型コロナウイルス感染防止対策として実習指導者が年1回オンラインでの実施となった。そのため、病棟ラウンド時に実習指導者と教員間で情報交換を行うなど、協同での指導を心掛けてきたが、統一した情報交換・情報共有ができなかった面もある。今後は、実習指導者と教員との協同にむけた場の確保をしていきたい。また、患者の尊厳を守り、安全の確保、個人情報の遵守などについて事前のオリエンテーションで徹底し、誓約書を提出させている。実習におけるインシデントに関して、学生がレポートにて振り返りを行い、改善策を考えるよう指導している。学校側は、インシデントの状況分析を行い、その結果を再発防止のために教育内容へ反映させている。

IV. 教授・学習・評価過程

講義計画は、新年度に向け、講義内容、科目間の関連性などから講義進度表を教員間で再検討し、年間講義計画を立案している。また、新カリキュラム実施にあたり講義計画書は、ディプロマポリシーの関連も明記し、学習の目的がわかりやすいものとした。

講義内容には、プロジェクト学習やジクソー法を取り入れて、学生が自ら学習し学びを深めるものとしている。今後は、その成果を見ていきたい。また、学力向上を目指し、学習アプリの導入を試みた。しかし、勤務と学業の両立に困難をきたしている学生にとっては、学習アプリを活用する時間が取れているとはいえ、学習アプリというツールが定着しているとはいえない。

学習支援についてはチューター制をとっている。成績評価についてはGPA等の客観的な指標も積極的に活用している。また、国家試験対策については、1年次より国家試験のためのガイダンスを行い、模擬試験やグループ学習等を取り入れ強化している。

3年次の国試対策では、市販模擬試験8回、教員作成による模擬試験を実施した。また、感染対策を徹底し、学生全員が国家試験を受験した。その結果は、看護師国家試験の合格率【本校90%】【全国93.2%】と全国平均に達することが出来なかった。全員合格に向け更なる国家試験強化を行う必要性がある。

V. 経営・管理過程

今年も新型コロナウイルス感染防止対策のため運営会議（年4回）、実習指導者会（年1回）等の開催回数が減少したため、学生の教育に影響が出ないようにフォローした。また、学校評価を組織的に実施し、評価結果をもとに改善計画を策定している。また、教務会議を月1回行ない、そこでは教員間の意見交換や課題の改善策にむけた協議、決定事項の伝達を行っている。

各学年に対する指導方針を明確にし、教員間の学習支援体制を整えている。質の高い卒業生を輩出するため、個別面接により個々の課題を把握・指導するなどきめ細かい指導を行っている。

パワーハラスメント対策については、研修への参加や「心理的安全性」をテーマに教員間で意見交換を行うなど学校独自の取り組みを行っている。新型コロナウイルス感染対策に関する学生支援事業を活用し、実習時のPCR検査費用の負担軽減ができた。今後は、受験者数の確保や事業計画に基づいた学校運営に力を入れていきたい。

VI. 入学

入学生の確保は困難な状況にある。今年度は、夜間のオープンキャンパス4回、学校見学会4回、学生による卒業校へのオンライン学校紹介2校、ホームページの充実、ポスター掲示を行った。また、大牟田・みやま、荒尾市内の准看護師勤務者が多い施設を訪問し学校紹介をおこなった。入学試験は推薦及び入学試験を5回実施したが、入学生充足率は30%であった。今後は、入学者数の確保に向け、更なる対策を考えていく必要がある。

VII. 卒業・就職・進学

今年度は30名の学生が卒業した。卒業後の不安項目である看護技術については、「看護技術の卒業時到達度」を参考に定期的に実施状況の調査を行い支援している。

卒業生の進路については希望施設へ100%就職ができた。その内大牟田・みやま地区の地元への就職率は43%であり、地元への就職率の高さは「地域に根ざす」という本校の教育理念のあらわれである。就職先に関しては、試験時期や本人が何をしたいのか、希望施設などの相談を受けるなど支援を行っている。卒業生の就職後の評価は就職先との情報交換にて把握している。但し、卒業後年数が経過しての活動状況や就職先などの把握はできていない。進学に関しては助産学校へ受験を試みたが合格に至らなかった。助産学校への進学希望が2年続いたが合格に至っていない。今後は進学希望者への「合格」を目標にした教育支援体制なども検討していく必要がある。合格実績を積み上げて新入学の獲得の一助となるよう努力していく。

VIII. 地域社会/国際交流

学生と教員は看護教育活動の一環として、年1回行政が実施する地域健康促進活動や、夏祭りの総踊りへの参加を行った。大牟田市防災訓練において学生は、要救護者で参加し、貴重な体験に繋がっている。また、今年度は市主催の産業フェスタへも参加し、地域住民との触れ合い、看護教育活動についての情報発信を行った。今後も学校として地域の行事に参加し、医療・福祉への協力を継続して行う。

国際的視野を広げるため「国際看護学」の科目を設置し、国際看護の授業を受けている。また、令和4年次は、外国人看護師（EPA）の国家試験対策である外部模擬試験やグループ学習を一緒に

行っている。今年度は、グループ学習への参加はなく EPA との積極的にコミュニケーションをとる機会に至らなかった。今後もこのような異文化交流を積極的に行い、卒業後も看護専門職者として異文化交流を積極的に行える素地づくりを行っていく。

IX. 研究

研究に対する倫理審査を行うシステムは構築できている。

今年度研究に取り組む教員はいなかったが、教員の研究活動の成果を教育へ活かすことができる体制づくりが必要である。そのために研究活動をおこなえる時間、財政、環境などの確保と教員間で学びあい成長していくという文化的素地づくりを行う。

令和6年度の目標

1. 新カリキュラムにおける臨地実習の質の保証及び充実に向けた検討を行う。
 - ・実習要綱の作成、実習評価表、方法の統一
 - ・看護基礎技術項目の到達度検討
2. 新カリキュラム導入から2年目、教科目間の内容調整・教育方法、進捗などの検討を行い質の向上を図る
3. 国家試験全員合格に向けた1年次からの教育体制づくり
4. 各学年の教育目標の達成ができる。
 - ・1年生：解剖生理学の基礎学力を養うことができる。
 - ・2年生：病態の知識を応用した看護展開ができる。
 - ・3年生：臨地実習の内容の充実
国家試験全員合格に向けた学力の向上。

- 令和5年度目標
1. 臨地実習の質保証及び充実に向けた検討を行う。
 - ・ 臨地実習の目標達成に向けて教育方法や実習評価の体制づくりができる。
 2. 新カリキュラムの導入から1年目、教育課程・教育方法の評価の検討を行う。
 - ・ 講義や演習・実習の教育方法の評価の検討を行う。
 3. 各学年の教育目標の達成ができる。
 - ・ 1年生：解剖生理学の基礎学力を養うことができる。
 - ・ 2年生：病態の知識を応用した看護展開ができる。
 - ・ 3年生：既習の学習成果として国家試験全員合格できる。

評価基準 A：計画通り達成できた B：おおむね計画通り達成できた C：計画通りできなかったところもあり十分でない D：全く達成できなかった

目標	計画	実施状況（評価判断理由）	評価
1. 臨地実習の質保証及び充実に向けた検討を行う。	①基礎看護学実習Ⅰの実習計画を具体化 ②2年次の基礎看護学実習にむけた看護過程の強化 ③実習指導者との連携、実習環境の調整	①49回生の基礎看護学実習では、教育理念から目的・目標を立案し、12月から5日間実習を行い、全員合格した。しかし、看護問題のアセスメントについては、1年時、看護過程については、講義で3回履修するのみであるため学生にとっては、難しい状況であった。今後、講義の進捗と実習内容の整合性を図っていく必要がある。 ②48回生の基礎看護学実習にむけては、2つの紙事例を基に看護過程の学習をおこなった。また、1つの事例に対しては、看護計画を基に技術試験を実施した。全員合格まで計3回技術試験を実施した。基礎看護学実習では、32名中5名が看護過程において学習不足、技術力不足が要因となり不合格となった。学生の個々の状況に応じた指導などを行うなど指導方法を考えていく必要がある。また、実習では、ルーブリック評価を用いているが再度、評価の視点・点数配分など見直す必要がある。 ③47回生の臨地実習では実習教育形態をラウンド型から実習時間中の教員が現場にいる張り付き型へと変更し、実習指導の充実を図った。実習指導者会は、5月にオンラインにて実施であったが、各実習施設の指導者とは領域担当者を中心に連携をとっていった。再実習となる学生はいたが、全員合格をした。全体的に欠席者が多く追実習・再実習が多かった。次年度は学生の心身の健康が保てる関りをしていきたい。	B
2. 新カリキュラムの導入から1年目、教育課程・教育方法の評価の検討を行う。	① 新カリキュラムにおける講義のねらい・目標を講師へ説明 ② 新カリキュラムの実施 ③ 新カリキュラムの評価 ④ 実習の評価表作成	① 各講師へは個別に説明を行うことで理解・協力を得て実施することができた。 ② 計画した進捗に沿ってカリキュラムを運営した。 ③ カリキュラムを実施することで講義間の関連性、進捗など課題が明らかになった。次年度への検討事項とした。 ④ 各領域を担当が評価表の素案を作成したが、教員間の検討が行えていない。1年後には新カリキュラムの実習が始まるため早急に検討していく必要がある。	B

<p>3. 各学年の教育目標の達成ができる。</p> <p>①1年生:解剖生理学の基礎学力を養うことができる。</p> <p>②2年生:病態の知識を応用した看護展開ができる。</p> <p>③3年生:既習の学習成果として国家試験全員合格できる。</p>	<p>① 解剖生理学Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 90時間履修 解剖生理学Ⅱでは、プロジェクト学習導入</p> <p>② 2つの紙事例の看護過程の展開の学習 技術試験の実施</p> <p>③ ・業者模試、業者の講義受講、・教員出題の模擬試験、グループ学習にて学習強化</p>	<p>① 3月末に実施した外部模試では、解剖生理学で全国平均得点率では50.3%に対して49回生は54.6%で全国を上回っている。しかし、学力は二極化しており、正解率50%以上の学生は44%。低い学生は39.2%であった。この結果から、解剖生理学の基礎学力を養うことは出来ていない状況である。</p> <p>② 6月、10月に紙上事例の看護過程の展開を実施 8月 看護技術試験 3回の試験で全員合格 基礎看護学実習 合格者 26名 不合格者 5名 病態の学習、看護展開への応用ができるよう指導を行う必要がある。</p> <p>③ 3年生 国家試験が合格率は90%となった。早期からのチューター制度の導入、教員の補習を取り入れるなど国家試験対策の強化を図る必要がある。</p>	<p>B</p>
--	--	---	----------